

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年9月15日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 博士一貫課程・5年

氏 名 石内 良季

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	2025年度英国南アジア学会 (BASAS Annual Conference 2025)		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☒ ☐ 口 頭 ・ ☐ ポスター ・ ☐ その他(		
発 表 題 目	Discourse on Emptiness: Depopulation and Rural Changes in Eastern Bhutan		
開 催 場 所	ランカスター大学(イギリス)		
渡 航 期 間	2025年 9月 8日 ～ 2025年 9月 15日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	193,100
		宿泊費	42,885
		滞在費(大学規定日当x日数程)	24,000
		学会参加費(10-12の滞在費含)	76,542
		その他(現地交通費・ETA)	18,277
以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 研究者としてのキャリアを積むべく、国際学会で報告する機会を頂き、また、助成金を頂けたことに感謝いたします。研究費がなく、また、円安が進むなかで、国外での研究報告がますます厳しくなるなかで、このような助成事業を設けていただけることはとても助かります。今回の渡航では、なるべく安い航空券を手配したため、交付を受けた助成金額を少し超える程度での使用金額になりましたが、航空運賃がもう少し高ければ、大幅に助成額をオーバーしていたかと思われます。		

1. BASAS Annual Conference 2025 について

英国南アジア学会（BASAS Annual Conference）とは、英国に拠点を置く、南アジア研究における世界有数の学術団体の1つであり、英国内で毎年、国際研究集会を開いている。同学会では、インド、パキスタン、バングラデシュ、アフガニスタン、スリランカ、ネパール、ブータン、モルディブ、および南アジア系ディアスポラを対象とする人文・社会系の報告が中心であり、2025年は39の異なるパネルと基調講演、シンポジウムから構成されるプログラムが3日間にかけて展開された。その規模や研究対象地域でいえば、日本南アジア学会（JASAS）と同系統の学術団体であるが、JASASの報告者は毎年、その多くを日本人研究者が占めるのに対し、BASASはその多くが南アジア出身あるいは南アジア諸国に出自を持つ研究者からなっていた。そのため、自社会・自文化研究の色が強く出ていた点が、日本南アジア学会と大きく異なる部分であるように思えた。

2. 学会への参加を経て

報告者は、学会3日目に開かれたパネル「Crises of Modernity（モダニティの危機）」に参加し、「Discourse on Emptiness: Depopulation and Rural Changes in Eastern Bhutan（空虚についての言説：東ブータンにおける人口減少と農村変化）」という題目で報告した。その内容は、人口減少が進む東ブータン農村に住む人々が「消えゆく」と嘆く社会の変化を、現地語であるツァンラ語で「空白（emptiness）」を意味する *tongpa* という概念に着目して読みとくことを試みた。具体的には、東ブータンの人々が経験する *tongpa* という概念は、文字通りの意味で理解されているのではなく、空き家や耕作放棄地、盗掘被害にあった仏塔などを事例に、かれらが生活の変化を説明する際に *tongpa* という概念を用いる場合、それは満たされている状態を指すが、そこに存在すべきものではなく、かれらが森や不和、幽霊、霊魂と呼ぶもの——「制御されていないもの（untamed）」——で満たされている状態を指していたことを明らかにした。

質疑応答では、南アジア他地域でも人口流出が深刻化する農村との比較の視点や、本研究を実施するに至った研究経緯などについての質問とコメントを頂いた。本報告の内容は博士論文の一部であるが、いずれは英語論文として投稿を予定しているので、今回の報告は、その準備段階から報告に至るまで、論文内容のブラッシュアップに繋がったといえる。

また、コーヒーブレイクや夕食会では、英国に拠点を置く同世代の研究者らとつながりを築けただけでなく、昨今の南アジア・ヒマラヤ地域の研究動向に関する情報交換を行なうことができた。南アジア研究におけるブータン研究の割合は、今回のBASASでも、私のみがブータンに関する発表を行なったように非常に少ない。BASASの課題として、主催者側がIndocentric（インド中心）な状況をどう打開するかが課題と言っていたが、これはJASASでも同じであろう。いずれにせよ、今回の学会参加を経て、自身の研究内容の深化と、英国を中心とする南アジア研究者との関わりの構築、そして今後の研究に対するモチベーションを得られたことが大きな成果であった。